

現代根付

# 宗

Contemporary Netsuke  
Newsletter

## Salon

Issue. 04

SPRING ~SUMMER

4月～6月企画展

テーマ

根付はいかに  
生まれたのか

### 『根付の カタチ』展

4月 4月1日(木)～30日(金)  
その先の展開が気にかかる  
「魅惑的な動き」展

5月 5月1日(土)～30日(日)  
見て取る力が想像を膨らませます  
「湧き立つ想い」展

6月 6月1日(火)～30日(水)  
精緻な技巧がリアリティを生む  
「ゆたかな発想」展

INDEX

- 企画展の見所
- 清宗根付館だより
- 根付研究最前線
- 作家の視点

[発行元]

公益財団法人 京都 清宗根付館  
〒604-8811 京都市中京区壬生  
賀陽御所町46番地(壬生寺東側)  
電話 075(802)7000

www.netsuke.jp

京都清宗根付館



beyond  
2020  
京都文化力

日本で唯一の現代根付専門美術館

## 京都 清宗根付館 企画展のご案内

根付の魅力とは何でしょうか?これまで多くの方が根付の斬新な題材や洒落た意匠、個性の発露などに注目してきましたが、本展では根付の「カタチ」そのものに焦点を当て、その魅力を探ってまいります。そもそも根付らしいカタチとは何か?そこには根付の発祥から400年のあいだの創意工夫によってもたらされた技術の結晶があり、また私たちの美を呼び起こす普遍的な原理が隠されています。

根付は実用するものとして発展した背景から、突起や角のない手に馴染む形状が一般的とされています

が、ただ単に丸めるのではなく造形上の装飾的効果をもたらすために視覚的な挑戦を繰り返してきました。結果として六方どの面から見ても正面になるという独自の表現を生みだします。それは実用の制約もたらした造形の革新であり、世界に類をみない彫刻文化となりました。現在だからこそわかるのは全ての工芸の最終目標は根付であったと言えます。

そうした「根付らしさ」を現代根付作家たちの協力を得ながら、それぞれの作品で検証するとともに、構成学の視点から造形の本質を浮き彫りにして参ります。

宗

### 4月～6月 企画展の見所

4月 その先の展開が気にかかる  
「魅惑的な動き」展

根付の量塊のなかで、直感的で魅惑的な作品にするために構図を探る作家を特集します。対比や粗密、視線誘導などの企みによって、<動き>を表した作品を紹介します。



「藤壺」高3.9cm  
及川 空観(1968～)



「Guts石松」高3.7cm  
山本 伊多呂(1961～)



「九紋竜史進」高4.9cm  
森 哲郎(1960～)

5月 見て取る力が想像を膨らませます  
「湧き立つ想い」展

作品とする対象と真摯に向かい合い、写し取る時に誘発される対象の本質や作家の心意を精緻な技術によって表現しようとする作品を紹介します。



「猫息」高3.6cm  
平賀 胤壽(1932～)



「ダリヤ」高2.0cm  
中川 忠峰(1947～)



「銀杏」高1.4cm  
中畑 泰成(1953～)

6月 精緻な技巧がリアリティを生む  
「ゆたかな発想」展

変幻自在な発想をどう造形にまとめるかという機略に作家の個性が光ります。細密な描写によるリアリティと、イマジネーションとの落差が驚きと発見をもたらします。



「翔夢」高4.1cm  
黒岩 明(1949～)



「二重奏」高2.9cm  
向田 陽佳(1968～)



「人魚」高5.0cm  
高木 喜峰(1957～)

宗

### 清宗根付館 だより

#### 奈良県大和郡山市主催「第9回水木十五堂賞」を当館長の木下宗昭が受賞

奈良県大和郡山市が郷土の文人にちなんで、幅広い資料の蒐集や博物学的研究を行い社会に貢献された人物を表彰する「水木十五堂賞」を当館長木下館長への授与を決定され、2月1日、同市内DMG MORI やまと郡山城ホールにて「第9回 水木十五堂賞」授賞式を開催されました。当館の創設以来の基本方針である「根付文化の継承と発展」および「根付の蒐集、保管、展示、研究」といった学芸活動を高く評価されたものです。

授賞式は、新型コロナウイルスの影響で規模を縮小して実施され、最初に大和郡山市・上田市市長様より「日本文化である根付の今後の発展を期待します」とのご祝辞をいただきました。また選考委員長を務められた奈良県立図書館情報館・千田館長様が今回の選考理由として、根付の伝統継承と文化普及に寄与した当館の実績を挙げられました。

お二人のメッセージを受けて、木下館長は「根付作家の活動を奨励していくと共に、文化的・芸術的価値と意義を追求し、我が国固有の文化資産として、根付芸術を揺るぎないものにしていきたい」と今後の抱負を述べました。

授賞式に伴い、郡山城ホールにて1月28日から2月4日にかけて記念展示会を開催。当館所蔵作品43点を展示して市民の方にご覧いただきました。また当館で発行した図録すべてをホールに併設されている市立図書館に寄贈いたしました。

当館では引き続き、才能豊かな根付作家の活躍の場を設け、これからもより多くの方々に根付の魅力をお伝えして参ります。



回水木十五堂賞 授賞式  
受賞者 木下 宗昭 氏

元禄期に人気を博した井原西鶴の浮世本を開けば、大坂や京で根付が「世間道具」として、町人に親しまれていたことが随所に伺えます。『日本永代蔵』には、「鹿の角の根付」が親仁九助の少ない人並の遺品の一つ上げられ、また、『好色一代男』では「唐木細工の根付」が遊離で豪遊する大臣を表す一つとして描かれています。これは何も物語だけの話ではなく、元禄期の生活を図解した『人倫訓蒙図彙[1690]』には、寺町をはじめとするあちこちで、「角細工」の職人が、根付の制作も行っていると伝えています。こうした状況を考え併せれば、根付は一部の好事家の物好きの域を超え、町人の生活に浸透した元禄文化の一つの表象と観取できるでしょう。

では、私たちが元禄文化で花開いたこの根付に、根付独自の文化的な価値や意味を探ろうとする際、どのような視点が手引きとなるのでしょうか。ここに格好の視点を与えてくれるのが神林恒道先生の論考です。そもそも、私たちが芸術や文

化を考える際、今なお無視できないのが、我が国の伝統美術の再興に尽力した岡倉天心[1863～1913]による、近代国家の威信をかけた文化的アイデンティティーの主張でしょう。天心が『稿本日本帝国美術略史[1901]』を編纂する以前に、我が国には、今日のような古代から近代へと連なる発展的な歴史観に基づく美術史など存在しませんでした。天心は日本文化の庇護者であったアーネスト・フェノロサ[1853～1908]の教授のもと、ヘーゲル流の歴史の弁証法を美術史のモデルとしました。ここで天心が日本美術の精髓とみなしたのが、室町時代の美術であり水墨画でした。そしてここを文化的な頂点とし、これ以降、日本美術は退勢へと向かうと天心は見立てました。なお、能狂言・茶道・花道・香道など、今日、我々が日本の伝統文化として想起する文化が生まれたのもこの時代です。

さて、こうした芸術文化の根底にあるのが虚飾を排した精神主義です。ここから生まれた閑寂な

「わびさび」へと収斂させる文化の捉え方が、バツサリと切り捨ててしまった文化こそ、とりもなおさず町人文化でした。芝居小屋や遊郭など、ここで芸事や戯れ、そして男女の密かごとが、絵(浮世絵)となり歌(新内・端歌)となりました。精神主義を一方とするならば、この官能的で感覚主義的な世界が、根付を単なる留具から文化的な所産にまで昇華させた母胎ではなかったでしょうか。こうした「悪所」の美意識を詳らかにしていく中でこそ、根付の文化的な側面が見えてくるのだらうと考えられます。

公益財団法人 京都 清宗根付館 学芸員  
大西 忠雲

<推奨本および参考文献>

・神林恒道『美術教育と日本の伝統文化』『教育美術』1837 教育美術振興会 平成24年・神林恒道『美術』と『美学』[LOTUS]31 日本フェノロサ学会 平成23年・山口静一『フェノロサと日本美術』『フェノロサ』上 三省堂 1982年・井原西鶴『日本永代蔵』元禄元年 東明雅校訂 岩波書店 1956年・井原西鶴『好色一代男』天和二年 横山重校訂 岩波書店 1956年・著者不詳『人倫訓蒙図彙』元禄三年 朝倉治彦訳 平凡社 1990年『稿本日本帝国美術略史 帝室博物館館蔵版』隆文館図書 大正5年

## 「第7回 ゴールデン根付アワード」グランプリ 和地 一風氏 インタビュー

この度の第7回ゴールデン根付アワードグランプリの受賞おめでとうございます。

### ●受賞作品「剣豪將軍 足利義輝公」について

室町幕府第13代征夷大將軍で剣豪將軍とも呼ばれた「足利義輝(よしてる)公」(1536年～1565年)の最期の勇姿を彫らせて頂きました。

失墜していた將軍の權威を復権するという時代の流れと逆行する事に執着する「哀れさ」に惹かれ、己の最期を悟りながらも最期まで武家の頭領としての「意地」を見せて奮闘する姿を表情と仕草からも感じられるよう気を配りました。

### ●根付を始めたきっかけ

会社勤めをしていた20歳過ぎの頃から、職人の世界に興味を持ち始め、ある書店で別冊太陽「印籠と根付」を見つけ、根付の持つ繊細さと小さな世界の中の物語性やユーモアを散りばめた自由な発想に衝撃を受け、「探していたのはこれだ!!」と直感しました。

それで蒐集するには経済的にも余裕もあまりなく、骨董店でもなかなか好きな意匠にも巡り会わなかった為、自分で彫ってしまえば良いと思い、千葉県に住んでいるので県内の根付師さんを訪ね歩き、日本象牙彫刻会(現在の日本左刃彫刻会)の根付教室を紹介されて、そこで習い始めたのがきっかけです。

### ●根付の理想的なカタチ

理想とする形はシンプルで掌に吸いつくように馴染み、このままずっと撫で続けていきたい!



思うような形が末永く愛されると信じています。

そして、そのシンプルな形の中にもちょっとした「手触りの違い」が入っていると尚良いと思います。例えば研磨でツルツルな領域と、毛彫り、模様彫りを施した領域を散りばめ、触感と見た目の違いを愉しめるということです。

さらには素材そのものの自然な形や景色、風合いを活かして、その素材との共同作業の結果生まれてくる違和感のない造形も好きです。

### 和地 一風(わちいっふう)

1996年根付制作開始。雅号の通り一風変わった視点から創作したいと語る一風氏。題材は妖怪などの空想の生き物を得意としていて、対象の内面の機微まで伝えたいと取り組んでいます。



京都 清宗根付館 公式ホームページのFacebook、Instagramにて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。また現在、LINE 公式ページ開設、および「友の会」の発足に向け準備を進めています。概要は改めて発表いたします。



←公式サイトはこちら



### コロナウイルス感染症による感染拡大防止への取り組みに関して

- ・入館時にスタッフにより、非接触による検温と手指のアルコール噴霧をいたします。(37.5度以上の発熱がある場合は、入館をお断りさせて頂く場合がございます)
- ・万が一、コロナウイルス感染者が発生した際の対策のため、入館時に住所・氏名等のご記入をお願いしております。
- ・マスクの着用にご協力をお願いいたします。当館スタッフもマスク着用で業務にあたらせていただきます。



公益財団法人 京都 清宗根付館とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長CEO 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね(宗)とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。



佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都清宗根付館を応援しています。

